

高く晴れ渡った日であったが、遠く東京などからも昔の教え子たちが集まって、真島次郎教授のありし日を偲んだのである。

真島次郎は明治十八年三月三日、川副町大字小々森字久町で生まれた。父は真島覚右衛門、母はトラ。葉隠武士の血をひく士族であった。兄の真島茂輔も早くから教職にたずさわって小学校校長や視学をした教育界の偉丈夫であった。次郎は明治三十一年佐賀中学校に入って三十五年卒業したが、この同窓には海軍大臣となった吉田善吾大将、京大教授高田保馬博士、県知事や代議士となった中野邦一、歌人中島哀浪、医者で粹人だった後藤道雄博士、毎日新聞の副主筆となった樽崎観一など多士済々。また陸士陸大を出たが、大正三年の日独戦争で戦死した犬井道出身の横尾平少佐も同窓であった。

真島次郎は佐中を出てからすぐ上海東亜同文書院の二期生として入学し、まだ日露戦争中の三十八年三月

卒業と同時に、院長からの求めに応じて同校の助教授となった。だが頭脳はずばぬけても体が弱く、病気のためいったん退職して療養後、明治四十三年教授兼幹事として復職、書院経営の最も困難な時代、根津一院長を助けたが、病気を克服することができず、四十一歳の若さで大正十四年十二月二十八日、上海で客死した。

真島次郎は正統な北京語教育の天才的学者といわれ、書院の卒業直前、犬養木堂が中国漫遊をした際も、根津院長の推薦で真島が北支、中南支を案内して通訳をしたという。真島が二十年近く東亜同文書院教授としてのライフ・ワークは、正統正確な中国語を教えることにあつた。真島が執筆編集して、書院の教科書に使つた「華語萃編」は中国語教育の宝典として日本一の折紙をつけられた。その厳格な教授ぶりは、書院の学生たちの間に「英語にも四声ありと真島言い」との川柳があつたことでも想像がつく。

人間みな四十数年も経つと昔のことなど、一切合切

忘却の彼方に去つてしまふものだが、学恩の高く深かつたことを思い起こした東亜同文書院の卒業生たちが、真島次郎教授を追慕して顕彰碑を建設したわけである。町民の誇りと同時にその遺徳を偲ぶべきだろう。

二 川副出身の佐賀郡会議員

郡制は明治二十三年に府県制・郡制として公布されたが、これが実施は全国まちまちであった。即ちこの実施は明治二十四年に大分県など全国合わせて十県、愛知県が二十五年、宮城県が二十七年、福岡、熊本など五県が二十九年、佐賀県は長崎、宮崎など合わせて十四県が三十年から実施し、沖縄県などは四十二年に実施したのである。これには郡の統廃合が前提となつてきたが、佐賀県は明治二十九年に三根、養父、基肆の三郡が合併して三養基郡が誕生したわけである。こ

の郡制は大正十二年四月以降逐次廃止することになつたが、明治三十年以降、佐賀郡会議員二十数人中、川副町出身者で一回以上当選した議員は次の通り。

江頭舜逸、吉武豪、徳富雄八、田村幸逸、副島巳之
一（以上南川副）、今泉良子、黒田重雄、真島覚右衛門、福岡作市（以上西川副）、森太市、江口善作、
弥富伴吉、岸川利三郎（以上中川副）、中島嘉、西原藤三郎（以上大詫間）

三 川副町出身、最初の国会議員

福岡日出磨（明治四十二年十一月二十一日生）



昭和三年県立佐賀中学校を卒業し、同五年二月上海同文書院を中退し、西川副広江で清酒「窓の月」の酒造業